



## シクラメン

# 小さな体に秘めた生命力



あべ菜穂子

灰色の雲に覆われ、すっかり冬景色となったロンドンの街で、健気に我ここにあり、とひとり小さな声で主張している花がある。

シクラメンである。日本でも人気のある鉢植えシクラメンとは違う、野生のシクラメン。葉を落とした木の根元や冬枯れの花壇の片隅で、背丈15センチほどのから

だにピンクやうす紫の花びらをまとい、静かにたたずむ。そこだけ新しいのちが宿ったかのように。

原産地は南欧。晩秋から冬を通じて次々と花をつける。耐寒性に優れ、積雪にあえば雪を持ち上げて花を咲かせ、氷点下の気温にもびくともしない。しかし、小柄な姿は可憐である。



おびえたようすの小さなシクラメン

まるで子ウサギが耳をピンと後ろに向けたかのよう

に  
(ヴァイタ・サックヴィル

ウエスト「ザ・ガーデン」より)



古代ギリシャの時代から

人々の暮らしとともにあった。根には出産を助ける薬効があり、その効用があまりに高いので、妊婦がまたぐと流産すると信じられた。花を終えたら花茎がゼンマイのようにくるくると縮まるため、ギリシャ語で「キクロス」(「輪」の意味)と呼ばれたのがシクラメンの名の語源。イギリスには16世紀末ごろ伝わったとみられ、花の薬効と迷信がギリシャからそのまま渡

来した。

日本で出回る大輪の観賞

用シクラメンは、ペルシャ産の原種が20世紀はじめにヨーロッパで品種改良されて生まれた。こちらは冬に家庭の窓辺や居間を優雅に飾るが、戸外では生き延びることのできない「箱入り」シクラメンである。

本来たくましい生命力を備えたシクラメンは、人間の手が加わって美しいがひ弱な花に変身したのである。

(ロンドン在住ジャーナリスト、写真も)

第4日曜掲載